



◆令和8年度を迎えて◆

新年度の始まりにあたり、御挨拶申し上げます。りんご研究所では、青森県の果樹産業のさらなる発展を目指し、本年度も総力を挙げて研究開発に取り組んでまいります。本県の果樹は、深刻な人手不足や地球温暖化による気象変動という大きな問題に直面しています。これらを解決するため、最新の解析技術を駆使して、美味しく作りやすい新品種をこれまでよりスピーディーに開発する「次世代の育種」に注力します。また、ロボットやスマート機械を活用した作業の省力化、夏の猛暑から果実を守る技術、変化する病害虫への新たな対策など、時代のニーズに即した技術の確立を急ぎます。青森県産の果実が将来にわたり愛され続けるよう、職員一同、未来を見据え

た研究に励んでまいります。本年度もどうぞよろしく願います。

◆研究風景く人工受粉く◆

栽培部では、5月初旬に人工受粉を行いました。近年は、これまで受粉を支えてくれていたマメコバチの個体数が減少しており、安定した結実量を確保するため人工受粉の重要性が高まっています。研究所でも、試験樹に十分な果実がならないと研究に支障が出るため、手間はかかりますが、一つ一つ丁寧に受粉作業を行っています。

作業には、おなじみの「梵天」と、最新技術の「静電風圧式受粉機」を使用しました。それぞれの特徴を比較すると、「梵天」は中心花に確実に受粉できる一方で、作業に時間がかかりました。一方、「静電風圧式受粉機」は短時間

で広い範囲を受粉でき、作業効率がとても高くなりました。結実率は、本研究所での調査結果から、「梵天」と同程度であることが確認されています。しかし、「静電風圧式受粉機」は花粉の使用量が「梵天」よりも多くなるという特徴もあります。近年は中国産花粉の輸入停止などの影響で、花粉の確保が難しくなっており、安定した花粉の供給が求められています。今後、「静電風圧式受粉機」をさらに普及させるためには、花粉の安定供給に向けた研究が必要だと感じました。



◆品種のはじまり◆

品種開発部では4月下旬から5月上旬の開花時期に、新品种開発を目的とした交配作業を行っており、並行して来年使用する

花粉の採取も行っています。

圃場からバールン状の花蕾を採取した後、櫛を使って花蕾から薬を取り出します。その際ほかの品種の花粉が手につかないように、ゴム手袋を着用します。また、取り出した薬を貯めておく容器も品種が変わるごとに取り換えています。

無事に薬を採取し終わった後は、不純物をピンセットで取り除き、平らなトレーの上に薄く広げます。薬が重なった状態だと蒸れてしまうからです。開薬器内の恒温下に1日から2日置くことで薬が開き、内部の花粉を取り出すことができます。採取した花粉はガラス容器に乾燥剤と共に密閉して冷蔵庫に保管します。

来年

は何組交配するのか、どの花粉が選ばれるのか、ガラス容器の中で、花粉たちは静かにその時を待っています。



◆コンフューザーRを

設置しました◆

5月15日

(金)、所内の圃場(約8ヘクタール)において、交信かく乱剤「コンフューザーR」の設置作業が行われました。作業はモモシンクイガ



の成虫が発生する前の5月中旬に合わせて実施し、よく晴れた青空の下、36名の職員が参加しました。作業開始に先立ち、病虫害管理部の研究員より取り付け方法についての説明が行われました。その後、各圃場に数人ずつ分かれて作業を開始しました。初めて作業に従事する職員もいましたが、1時間あまりでスムーズに作業を終えることができました。

ところで、どうして「コンフューザーR」が必要なのでしょう？本剤は、成虫の交尾を継続的に阻害する交信かく乱剤で、令和6年の「りんご病害虫防除暦」か

ら基準薬剤として採用されています。現在、害虫防除を取り巻く環境は厳しさを増しています。温暖化によるシンクイムシ類の発育期間の短縮や、リンゴコカクモンハ

マキの殺虫剤に対する感受性の低下、さらに、農薬の再評価制度に伴う使用可能な殺虫剤の減少により、通常の15日間隔の殺虫剤散布のみでは防除が困難な状況になっています。そのため、通常の薬剤散布に加え、コンフューザーRの利用が必要不可欠となっているのです。

◆おとう「ジユノハート」

着果・着色管理研修会◆

5月15日、りんご研究所県南果樹部の圃場を会場に、今年度1回目となるジユノハート研修会を開催しました。関係者や生産者など44名が参加し、着果・着色管理のポイントと、病虫害対策について研究員が説明を行いました。また、三八農林水産事務所から現地の状況について説明があったほか、県りんご果樹課からは、ジユノハートの出荷規格の変更点

や、活用可能な補助事業について情報提供がありました。



◆新人紹介◆
本年度から採用となりました、栽培部の対馬 暉武(つしま あゆむ)と申します。弘前市出身で、大学は秋田県立大学を卒業し、4月から青森に戻って参りました。

や、活用可能な補助事業について情報提供がありました。
◆新人紹介◆
本年度から採用となりました、栽培部の対馬 暉武(つしま あゆむ)と申します。弘前市出身で、大学は秋田県立大学を卒業し、4月から青森に戻って参りました。

大学の卒業研究では、植物ホルモンであるジベレリンの花成抑制効果を利用した新たなリンゴの摘花・摘果作業省力化技術の開発に取り組みました。現在は、植物成長調整剤の利用に関する研究を担当しております。



りんごに関する知識や技術はまだまだ足りませんが、精一杯勉強し

果樹生産者の皆様の役に立てるような研究を早くできるようになりたいと考えております。よろしくお願いたします。

◆編集後記◆

新体制でお届けする第12号はいかがでしたでしょうか。今号は春の人工受粉の取り組みや新人の紹介など、当研究所の「今」を分かりやすくまとめました。生産者の皆様を技術で支えるべく、職員一同研究に邁進してまいりますので、本年度も「りんご研究所ニュース」をよろしくお願いたします。